

タビテウエア・ノースの大リング

(キリバス金環日食観測記ダイジェスト)

大越 治

★ 我々らしい観測がしたいが計画は難航

92年1月5～4日の金環食で、まず観測候補地に上がるのは当然ロスだ。ロスは晴天率もよく交通の便もよい。短期間に安く往復できるし宿泊設備も整っている。しかし高度が低い！過去14回の日食観測で見られなかったのは3回だが、そのうち2回が日の出直後のものだった。いくら晴天率が高くて、水平線にちょっと雲が出たらアウト。統計はあくまで統計にすぎない。もう一つ。私はもう大勢のツアーで行くのはいやだ。だがロスに個人旅行するのは治安上恐い。そこで友人の道家氏らと始めたのが今回の観測計画だった。

金環帯には太平洋の島の幾つかが入っている。比較的行き易そうな島はナウルだが、ここではまだ高度が低く継続時間も短い。今回の金環は今後600年間で最も継続時間が長いのが特徴だ。中途半端な継続時間では行く意味が無い。またこの時期、ナウルの付近には熱帯集束帯が横たわり、天候が悪い。となると候補地はただ一つ、キリバスだ。キリバス共和国は、赤道と日付変更線の交わる海域に、島が点々と散在する国だ。首都のタラワ島は残念ながら金環帯には入らないが、その南にある離島の幾つかが金環帯に入る。道家氏の尽力でローカル線のスケジュールが調べ上げられ、観測候補地はタビテウエア北島に決まった。さらに、飛行機の定員(12人)と宿泊(ホテルはない)を考え、メンバーは最大でも10名を越えないように計画が立てられた。

領事館を通じ、観測旅行の可能性を打診する。返事は「宿泊と車はOK。ただし寝る道具は必ず持参すること」だった。どんな所に泊まるのだろうか。期待と不安に満ちた準備作業は、突然大きな障害に阻まれることになった。旅行社に依頼していた航空券が取れない。航空会社にはリクエストを出し続けた結果、往復とも座席が確保できたのは石井、木寺、吉村、綿貫の各氏と私の5名だけ。非常にさびしく不安な旅立ちとなったのである。

★ 長い旅の始まり

12月28日。成田から雪のソウルを經由してグアムへ。ここで便を乗り継いでトラック・ボナベ・クウェゼリンと太平洋各駅停車の旅だ。マーシャル連邦の首都、マジュロに着いたのは29日の夕方。この島に1泊し、翌30日にはキリバス共和国の首都のタラワに入るはずだったが、エンジントラブルとやらで便は24時間の遅れ。しかたなくもう1泊する。

31日、大晦日。早朝無事にマジュロを飛び立ち、2時間ほどでタラワに到着。出迎えて下さったJAICAの郡さんのお話では、1日遅れ程度で、しかも荷物が全部届くというのは全く幸運なことだそう。ホテルに向かう車窓から見る風景は、まさに南の島を絵に描いたようだ。椰子の木陰に建つ高床式の家、裸の子供たち、色とりどりの洗濯物、コバルトブルーの海。オシントイホテルは近代的でござっぱりした気持ちのよいホテルである。すぐにもう一人の在住

日本人の峰岸さんにお会いして情報収集。午後は国営のツンガル航空のオフィスに出かけ、タビテウエア島に飛ぶチャーター便の条件確認と料金の支払いを行う。

年が明けて1月1日。Tシャツ短パンゴムぞうりでは、お正月気分にはなれない。明日の出発に備え、峰岸さんのご協力のもと、食料の買い出しや情報収集にはげむ。

★ 南海の楽園(?)タビテウエア

いよいよタビテウエア北島に渡る1月2日。私たちが空港に着くと、人ごみをかき分けながら恰幅のよいおじさんが近づいて来た。そして「飛行機にぜひ一緒に乗せて欲しい」と必死の申し出だ。見ると、87年のガボン金環皆既日食観測で出会った、イタリアのアスカーリ氏ではないか！ アスカーリ夫妻はフィジー経由で来たとのこと。しかし、来てみるとタビテウエア行きの定期便は満席で乗れない。ちょうどチャーター便が出ると聞いて渡りに船と私たちに接触したのだそう。さらに、重い荷物はフィジーに置き去りにされてしまったと言うではないか。郡さんから聞いた話の意味が初めてよくわかった。私たちとしても、チャーター料金を少しでも浮かせるために歓迎だ。結局私たち5名、アスカーリ夫妻、そして途中のアベママ島に行く家族連れを乗せたトライランダー（12人乗り）機は、9時に空港を離陸した。



30分ほどでアベママ島に着陸。ここで家族連れを降ろし、10時28分にいよいよタビテウエア北島の飛行場に着陸だ。飛行場と言ってもただの空き地である。島の責任者のトンゴイアイア氏の出迎えを受ける。50歳過ぎの恰幅のよい精悍な顔立ちの方だ。さっそく警察のジープでゲストハウスに向かう。

キャンプの覚悟で来た私たちだが、意外に立派(?)なゲストハウスに一安心。屋根はトタン葺き（雨水を集める為）だが、中は高さ2mほどの板で部屋に仕切られて、ベッドも蚊帳もある。窓は所々ガラスが抜け落ちているが、それだけに風通しはよい。管理人のウリアム氏が3食とも作ってくれる。他にアルバイトの姉妹が2人、手伝いに来てくれる。

さっそく荷物を置く。ベッドが二つずつの5部屋で定員10名だが、一番北東の部屋は、雨が降るとひどく吹き込むので使えない。アスカーリ夫妻が1部屋、私たち5人が3部屋を使ってちょうどだ。予定通り10人で来ていたら一般家庭にホームステイだったかもしれない。4本の柱の上に椰子の葉でふいた屋根が乗っているだけの、高床式で壁が無いキリバスハウスに泊まるのも一興かもしれない。どちらにしても、日本人の普通の女の子には1日の辛抱もあやしい程度のものだ。荷物を解き昼食を食べる。カンヅメを主にした料理だがけっこういける。

午後はさっそくトンゴイアイア氏の付き添いで、全部で8つの村に挨拶回りだ。トンゴイ

アイア氏、ウリアム氏、警察官は英語を理解するが、他の人々はキリバス語オンリーだ。おみやげに用意したタバコ、ライター、石鹸、キャンデー、ガム、そして日食の写真を8つの包に分けてジープで出発。一番北にあるタカブイブイの村から順にまわり、それぞれの村長さんの



家の上がって挨拶をする。村長さんの家といっても特に立派ということはない。高床式で壁の無い家だ。風雨をしのぐ時は、椰子の葉で編んだ「むしろ」を周囲にたらす。どこに行っても大勢の子供たちに囲まれる。時には椰子の実ジュースを振舞われる。きわめて平和で純朴な南の楽園に見える。とても大昔は人食いの習慣があり、キリスト教が入ってきた時、

宗派毎に血で血を洗う抗争をした島とは思えない。途中ジープのパンクというハプニングがあったが、無事に8村を回って仁義を切ることができた。これで原則として島中を自由に動けるようになった。この日に降ったスコールは、私たちにとっては台風のように思えた。

★ 日食に向かって

1月3日。午前中は太陽が見え隠れしている。スコールが降るとお手上げなので、観測地はゲストハウスの前に決めた。この日は太陽の移動方向の確認、GPSで位置の確認を行う。昼食後からは一転して猛烈な風雨になった。風呂桶をひっくり返したような風雨がトタン屋根にたたきつけるので、室内での会話は困難だ。風雨は夜まで続いた。この間、私はアスカリー氏とたっぷり話す時間が持てた。アスカリー氏は実にひょうきんな人だが、奥さんは控え目で英語を話さない。お二人とも、この島の暮しにかなりショックを受け、食事も口に合わないようだ。私たちが環境に順応して食事のお代わりをしているのを見て、一体どう感じたことか。

1月4日、日食前日。リハーサルの日だ。結構お天気が良い。朝食後からすぐリハーサルを始める。極軸を合わせ、画角を決定し、露光のタイミングを計る。午後からはウシロア村のマニアバ（集会所）に招かれ、歌とダンスを見せてもらう。大人も子供もみんなで歌い、素晴らしいハーモニーだ。トンゴイアイア氏が上半身裸で汗を飛ばしながら指揮をしている姿は迫力である。その夜もかなり強烈なスコールに見舞われた。電気は18時半から22時に限って使えるが、明日の本番に備えて早めに寝る。

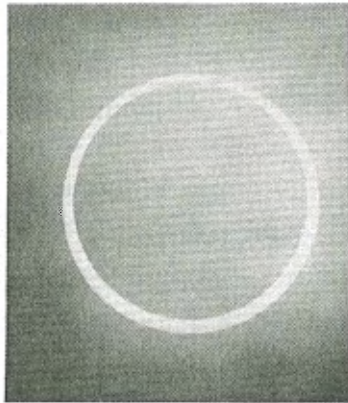
★ 極太のリング

1月5日、日食当日。台風並みに吹き荒れていた風雨も、朝には一応やんだ。しかし雲の量が多い。早めに朝食を作ってもらおう。アスカリー夫妻はほとんど食べることができない。とにかく観測準備だ。第1接触の時刻がきても相変わらず雲が厚い。フィルターを使わなくても、肉眼で欠けた太陽がよく見える。8時半を過ぎると気温が30℃を越した。風はかなり強い。

石井氏、綿貫氏の場所は風の通り道なので大変だ。吉村氏、私、アスカリー氏は、ゲストハウスのブロック塀を背にしているので幾分ましである。木寺氏はブロック囲いの中だ。雲のため皆ピントと露出に苦労している。

第2接触直前、分厚い雲が太陽を覆った。絶望だ。でも金環時間が10分35秒もある。1回くらいはリングが見えるだろう、と、割合気楽に空を見上げる。空飛ぶ絨毯のような雲がかなりの速さで動いて行く。もうリングになっているはずだ。10時のアラームが鳴る。太陽が顔を出した！ オーっ！という声が上がります。リングだ。太いリングである！ 沖縄が輪ゴム。去年のニュージーランドがイカリング。今回は「車ぶ」だろうと冗談を言っていた。そこまではいれないが、かなりの太さだ。まさに月の日面経過である。さっそくシャッターを切る。予定していたプログラムは破棄せざるをえない。見えた時に写すのみだ。にわとりが盛んに鳴いている。ひとしきりシャッター音が響いた後で、ようやくみんなに余裕の笑顔が出て来る。しかしすっかりした天気では到底ない。雲から出たり入ったりで結構忙しい。のんびりとビールでも飲みながら、などという夢は破れた。もっともこの島ではビール自体が夢なのだ。

次第に雲が薄くなってきた。リングの片隅に黒点が出ているのが双眼鏡でよく見える。皆既と違って周囲は割と静かだ。にわたりの鳴き声、風の音、そして時々地元の人達の笑い声が聞こえる程度である。第3接触は薄雲の中ながら、無事に観測することができた。あとは部分食だけである。ウリアム氏が椰子の実を割ってくれたので、椰子の実ジュースで乾杯をする。皮肉な事に空は見事に晴れ渡ってきた。あと20分でも雲の動きが早かったなら完璧な天気だったのだが。まあ、それでもたっぷりリングを堪能したのだから良しとしよう。太陽は次第に復元していくが、私は第4接触を待たずに撤収する。



★ 遅れてきたイタリア隊

アスカリー夫妻は帰国便の都合で、今日の昼の飛行機でタラワに戻る。私はその見送りを兼ね、明日のチャーターの確認に飛行場へ行くのだ。さらに、今日の早朝イタリアの観測隊14人がこの島を訪れ、飛行場で観測をしているはずだ。彼らの様子を見たいということもあった。早めに昼食を作ってもらうが、相変わらずアスカリー夫妻はほとんど食べない。それでもご主人は日食が見られたのでご機嫌だし、さらに、この辺境の地からようやく脱出できるという嬉しさが、特に奥さんの顔にはありありと見える。

飛行場に着いてみるとイタリア隊は影も形も見えない。飛行場の係員は、イタリア人などはこなかったよ、という。私もアスカリー氏もびっくり仰天だが、トンゴイア氏だけが泰然自若としている。彼には飛行機が来ないことなど珍しくもなんともないのだ。

アスカリー夫妻の乗った飛行機は無事にタラワに向けて飛び立って行った。See you next eclipse! 二人は明日、私たちがタラワに着く頃には、すでにフィジーに向かっているはずだ。

1月6日、早く起きて早朝の金星を撮影。今日でタビテウエアともお別れだ。チャーター便は予定通りに離陸。トンゴイア氏を乗せた警察のジープが伴走するが、あっという間に後ろになってしまう。10時8分、無事にタラワに帰還。再びオシントイホテルのフロントでチェックインをしていると、いないはずのアスカリー氏が歩いて来るではないか! フィジー便はまる1日の遅れだそう。なるほど予定の立たない地域である。

昼はホテルで改めて乾杯! 午後はツungal航空のオフィスで清算の交渉をしたりして、夕方ホテルに戻ると、アスカリー氏を含めた十数人が何やら異様な雰囲気でものを寄せている。夕食の最中、彼らがレストランにやってきた。アスカリー氏にいつもの陽気さがない。肩をすくめ「今日はちょっとばかり静かにしていない」と耳打ちしてくれる。なるほど、彼らが14人のイタリア隊なのだ。彼らはフィジーで機体故障のために足止めを食い、日食に間に合わなかったのだ。夕食の席ではこちらがどうしても盛り上がりしてしまうのだが、むこうの席はまるでお通夜のような様子であった。確かに予定通りにいかない地域だ。

★ 日本は遙かに遠く

1月7日。アスカリー夫妻を見送った後、一日中タラワ島の中を見てまわる。夜は峰岸さんのお宅に招かれ、海の幸をたっぷりご馳走になった。

1月8日、いよいよキリバスに別れを告げる日だ。空港に着くといやにガランとしている。なに、今日は飛行機が飛ばない!? そんなばかな。理由はエンジントラブルだとかフィジーが台風だとか、いや、マジユロが暴風雨だとかはつきりしない。この時点では、私たちはまだ事態を深刻には捉えられず、休日が1日増えたくらいの認識の者が大半だった。まさかこれがタラワ・マジユロと併せて4日間も足止めを食う事件の発端になろうとは、まだ誰一人として気がついていなかったのである。ここは本当に予定通りにはいかない地域なのだ!